

令和6年度 第2回  
西宮市文化まちづくり推進委員会会議録（要約）

日 時：令和6年11月20日（水） 午前10時00分～午前11時40分

場 所：西宮市役所8階 A813会議室

出席委員：初田会長、北村副会長、石原委員、坂本委員、田中委員、野田委員、  
萩原委員、三瀬委員

欠席委員：なし

事務局：長谷川産業文化局長、文化スポーツ課（石井担当課長、鳴坂係長、上念アドバイザー）、市民文化施設課（木村課長、水寫係長）、（公財）西宮市文化振興財団（土居事業課長、田口係長）

傍聴者：なし

---

（午前10時00分開会）

<「みる」「する」体験、つながりを深める取組例>

（事務局）

- ・資料に基づき説明

（委員）

・善照学園のダンスワークショップについて、その学校でワークショップを続けている理由は何か。

（事務局）

・善照学園は同じ児童養護施設の三光塾と同時期に始めたが、善照学園の希望によりダンスワークショップを継続している。アーティストはセレノグラフィカさん。三光塾では別の形で実施している。

（委員）

- ・中長期でじっくり1つのアーティストが関わることで見えてくることがあるかと思う。

（委員）

- ・ジャズを毎月実施されているのは良いことだと思う。参加者はどのような方が多いか。

（事務局）

・シニア層が中心だが子ども連れの方も来場されていた。普段、子連れではライブハウスに

行きづらいが、オープンスペースでの開催のため来場につながった。

(委員)

- ・実施した後、どこかに発信されているか。

(事務局)

- ・文化振興財団の X (旧 Twitter) や、アミティータイムで発信している。

(委員)

・いかに楽しく充実していたかを事業後にも発信することが増えている。ジャズは若い人があまり知らないということなら、若い人も参加していることが分かるような写真を発信すると安心して見に来てもらえる。終わった後にも発信することで次の展開、継続へと繋がっていく。

(会長)

- ・成果の発信をどのような方法で実施するか検討していただきたい。

(委員)

・主催側だけでなく来た人にも発信してもらえると良い。来た人が「いいね」と言っていることや感想をシェアしたり、発信を呼びかけたり、場合によっては応援団のようなものを作って発信ができるとよい。動画を撮ってすぐ YouTube にアップするなども考えられる。

(委員)

- ・音楽では参加者が演奏の様子を撮影し、ネットにアップしてよいコンサートはあるか。

(委員)

・そうしたものも増えてきている。ただ、ホールの中で静かに行われるクラシックのコンサートでは、著作権の問題もあり基本的には禁止されていることが多い。オープンスペースのコンサートでは拡散してほしいと思っているアーティストも多い。

(会長)

・拡散していくことで「推し」がつながり、アクションプランのテーマにあったものになる。音楽では著作権の関係で音源を流すことは難しいが、美術では撮影禁止のものは減ってきている。

(委員)

・小中学校アウトリーチ事業に今年度から奏者として参加しているため感想をお伝えしたい。木管 5 重奏は今年度 4 回を予定しておりそのうち 1 回目を実施した。

・文化スポーツ課から小学校の既習曲リストをもらい、編曲もして演奏した。難しすぎるかと思っていたが、後のアンケートを見たら意外とわかってくれており、「知っている曲が入っている」とか「すごいなと思った」といった感想があった。

・4曲演奏し、最後に質問コーナーがあった。演奏中は静かに聞いてくれていたが、質問コーナーではどんどん聞いてくれた。色々な質問があることは生演奏ならではの、CDで鑑賞するだけではここまで疑問はわからないし、実際に近くで演奏して興味を持ってもらえたと思う。演奏する方としても良い体験になったし、近くで触れ合うことはお互いに良い体験になることを実感した。

(会長)

・演奏者の方からの感想についてもお聞きしたい。

(委員)

・小学生ということで最初は落ち着いて聞いてくれるかとの心配もあった。教室は距離が近すぎるため演奏しにくいのではという心配もあったが、事前に距離をとるようなセッティングをしたり、打合せの際にもスタッフの方が手伝ってくれたり良い環境にできた。

・ホールだと表情が分かりにくいですが、アウトリーチでは一人一人の顔が見えるので真剣なまなざしで聞いてくれていたことが分かり、いつも以上に演奏者としても嬉しい。

(委員)

・子どもをコンサートや美術館に連れて行って経験させたいが、楽しみ方を伝えるのが難しいと感じる。友達と一緒に体験することで友達の見方を学んだり、感覚の近い人と一緒に経験したり、場を共有することは良い活動だと思う。

(会長)

・親子向けの体験イベントにはどのようなものがあるか。

(事務局)

・文化振興財団で実施しているプリンセスコンサートは、初めて親子でコンサートを楽しむことをコンセプトに3歳以上を対象に実施している。ディズニーのプリンセスにまつわる曲のほか、クラシックの曲も入れて1時間のプログラムとしている。

・その他、美術関係の子供向け事業を企業・団体と一緒に実施したり、アートなお化け屋敷という体験型のイベントを色々な団体の協力を得て実施したりした。

・このほか、野外アートフェスティバルは、令和7年度は市制100周年イベントにあわせて六湛寺公園で実施する予定。親子でアートの経験をしたり、小学生から公募した詩を書き絵画の芸術家と一緒に1枚のパネルに描くパフォーマンスなどを実施する。

(委員)

・子どもたちは学校で音楽や図工に触れ合うが、ちょっと近いところ、例えば地域の公民館や、地域のアート作品―西宮浜にはいろいろなアートがあり、その中で市内の高校の生徒がダンスを披露したり、近隣の義務教育学校の吹奏楽部の生徒が演奏したりしており、ちょっと足を伸ばせば見えるとか、窓を開けたら見えたりするような取組は、お金もかからないし子どもたちからも好評で良いと思う。

(委員)

・公民館地域学習推進委員会と連携した取組について、アンケートでは「感動した」という感想があった。芸術文化センターでも新しい人を集めることは課題と感じており、この事業でコンサートに関心を持った人が市内にある当センターにも来ていただければ有り難い。市の取組と県がうまく連携できれば良いと思う。

(委員)

・市制 100 周年のまちなかにぎわい事業では、先行事業として既存のイベントが市制 100 周年事業として改めて位置付けられている。その中で市民有志のフェスやマルシェ、音楽、ダンスなど文化芸術の取組がある。これまで単独の部局では接点のなかったものが 100 周年という冠で改めてピックアップされており興味深い。

・例えば、鳴尾八幡神社を盛り上げる活動や甲子園まちなかフェス、商工会議所のくすのきコンサートなどがあり、市制 100 周年によって市内の色々な活動がつながり合わされる機会になっている。改めて、今、市制 100 周年の事業に位置づけられている中で、フェスなどのイベントに出店される方を求めているので、そのつながり直しが重要。

・100 周年という一つの冠、題目があると集いやすい。文化芸術という点で色々な活動をしている方をもう一度つなぎなおす良い機会になるのではないか。

(会長)

・市制 100 周年に関わるいろいろなイベントは地域や団体が自発的に活性化されているのか。市との関連はどのようになっているのか。

(委員)

・元々西宮市が関わって取り組んでいるイベントを 100 周年の位置づけにされているものと、地域や団体が自発的に市制 100 周年に位置付けるものの 2 種類がある。

・特にコロナ後に自発的な取組が多く出てきている。西宮浜総合公園でも市民団体による自主的な取組がある。

・まちなかにぎわい事業ではいろいろなつながりを作っていくので、そこと連携すればよいのではないか。

(会長)

・子どもから繋いでいくことに力を入れて取り組まれているが、民間から立ち上がったこと

と連携を深めることで、アクションプランのテーマにつながるのではないかと。

#### <文化まちづくり推進委員による現地視察>

(事務局)

- ・資料に基づき説明

(委員)

- ・大阪アーツカウンシルでの視察の経験から考えると、視察者に何を見てほしいか、ある程度行政側から視点を提示し、それに対してどう思ったかを報告する形が良いと思う。ぼやつとした感想にするとアクションプランに落とし込むことが難しくなる。
- ・大阪の場合は府や市の事業の概要や目的が明記されており、それをどの程度達成しているかを視察で見ている。

(委員)

- ・他の都道府県の視察の事例として、視察に訪れたら実施団体を励ましてあげてくださいというものがあつた。評価をするものと、実施団体とネットワークを作りここがよかった、ここを頑張ったらもっとよくなるというアドバイスを行う趣旨のものと、方向性によって分かれている。視察のニュアンスを伝えてもらえると意義ある形になる。

(委員)

- ・助成金の視察は励ますような内容、府市の事業評価はシビアに見ることが多いと思う。

(事務局)

- ・評論家の方に評論的な形で書いてもらうのとは少し違うものだと思う。文化振興ビジョンとアクションプランがあり、その視点からこの事業はどうかを見てもらう。あまり評価シートみたいにするのではなく、柔らかい形で励ましてもらえるような方が良いかと思う。

(委員)

- ・自主的に選ぶのもよいが、これはぜひ見てほしいというものがあれば提案していただくと積極的に見に行きたいと思う。

(委員)

- ・文化まちづくり推進委員による現地視察をしたらよいのではないかと、根底の問題意識はどのようなものか。それを共有していただくと考えやすいかと思う。

(事務局)

- ・色々な分野での専門分野の方が集まっていたいており、アクションプランについても前

回協議し、重点目標も共有していただいている。そうした目線で、これまでの経験を活かして専門の方に見ていただく機会というのはなかったため、改善や今後のアイデアにつながればということで提案している。

(会長)

・委員会で議論を深めることも重要だが、現場で感じて、考えたことをもとに進めることで一層良いものになるという整理かと思う。

(委員)

・公演というよりはワークショップやつながりに関する取組について視察し、学ばせていただければと思う。

(会長)

・ある程度、市の方でどこを見てもらいたいかの原案があれば参加しやすい。励まし系と聞き取り系、視察対象ごとに少し違うかもしれない。そうしたことも加味して考えると良いと思う。

(事務局)

・開催する事業の目的、対象は違う。アクションプランで目指していることも踏まえながら見ていただきたい事業をピックアップしたい。

#### <事業の充実に向けたインタビュー調査>

(事務局)

・資料に基づき説明

(委員)

・アウトリーチ事業は対象者が教員で、公民館は対象者がアーティストになっている。何か違いはあるのか。

(事務局)

・アウトリーチ事業では児童と教員にアンケートを取っているが、今回先生にお話を聞いて改善につなげたいという考え。公民館はアーティスト側と地域学習推進員を対象にインタビューをする予定。アウトリーチの出演者へのインタビューも今後検討したい。

(委員)

・小中学校アウトリーチ事業の教員のインタビューの対象はどの先生か。

(事務局)

・音楽や図工の教科担当の先生にお願いしたい。何年も実施している学校や、初めての学校などプログラムごとに調整しながら実施したい。

(委員)

・長く実施されているため変化が分かるようなターゲットへのインタビューをされてはどうか。1回で変化が出ることは難しいので長い目でアウトリーチをしていることによる変化のようなことも知りたい。

(事務局)

・学校を移って同じプログラムを実施している先生もいるためそのあたりもお聞きしたい。

(委員)

・5年は洋楽、6年は邦楽のようにプログラムを分けて実施しているため、学年によっても違いがあるのでそのあたりも聞いていただければと思う。

(委員)

・重点目標のアートの沼にはまり「推し」でつながることが、この事業を通じてアウトカムとしてできているかが究極的には調べたいことだと思う。

・一つのよりどころになりそうなのはアンケートのコメントで、これがアートの沼にはまっているのではないか、「推し」でつながっているのではというものがある。これについて、どう思われるかということをお聞きするとより分かってくるのではないかと思う。

(会長)

・重点目標がどの程度浸透しているのかを測定できれば良いが、芸術に関わることなので数字で測ることはなじまない。何か測る方法はないかということで、インタビューによる質的な研究が有効かと思うが、どのように分析するかは研究していただきたい。あまりにも数値化や効果成果をやりすぎるのはどうかと思うためそのあたりの加減、豊かな何かを示せると良いかと思う。

## <市民意識調査について>

(事務局)

・資料に基づき説明

(委員)

・回答率はどの程度か。

(事務局)

- ・例年 6 割に届かない程度、前回では 56.1%となっている。

(会長)

- ・分析は業者に頼むのか。

(事務局)

- ・市の担当部署から業者に委託をして実施されている。単純集計のほか他の項目とのクロス集計、分析のコメントとともに公表される。

(委員)

- ・次回が令和 10 年度ということだが、このアンケートの変化によってアートの沼にはまるというアクションプランの実現度合いを測るということになるのか。

(事務局)

- ・市民意識調査は非常に範囲が広く、その数字を直接アクションプランに当てはめることは難しいが、状況の把握はする必要がある。アクションプラン後期の振り返りと合わせて市民意識調査も実施したいと考えている。

(委員)

- ・同じ質問は過去の質問にもあって、経年変化も見られるのか。とりわけ、問 13 や問 14 がコアな質問になると思う。

(事務局)

- ・趣旨としては同様の内容を尋ねるものだが、前回の質問とは項目が異なるため直接の比較はできない形になっている。

(委員)

- ・他市の似たような調査と比較することも考えられる。

(委員)

- ・アクションプラン後期を検証するために、この市民意識調査を使うことは難しいということだが、どう検証するかは別途工夫されるということか。

(事務局)

- ・市民意識調査だけではプランの検証までは難しい。この質問を作るにあたってあまりに細かい質問だとアンケートそのものに応えにくくなるということもあった。西宮にお住まい

の方がどのように感じているかを聞き取るもの。

・実施した事業への評価については、インタビューや事業アンケートの中から個人の意見を拾いながら、一定効果があったか検討できるのではないかと考える。

・参加者数や満足度など数字に出る部分も参考になると思うが、いろいろな部分を複合的に見てどこが良かったのか、改善できるかの検討も随時していきたい。

(会長)

・この市民意識調査は西宮市民の文化意識みたいなものをある程度把握して、それをベースに推進委員による現地視察やアウトリーチ事業、公民館 100 周年事業への調査と全部ミックスさせながら成果を出して行けたらというイメージだと思う。

(委員)

・後期がスタートしたところなので、意識的に重点目標をどう評価・検証していくかという指標を考えていくことが必要と思う。

(委員)

・今回のアンケートのコメントはすごく大きな質的評価。自分もフルートを吹きたいとか、お母さんで行ってみたいとか、芸術に関わって生きていきたいということもあったが、その時はそう思っているが、その次に繋がっていくかがアクションプランを実現していくうえで重要。そこの橋渡しをどうやって仕掛けていくか。

・自発的に来てくださる人もいるが、橋渡しをどうするかということも並行して考えていけないと思う。

・そうしたことを測るテスト事業が始まってもよいと思う。お母さんと一緒に美術館に行ったかを測るためには、例えば金沢市の 21 世紀美術館では市内の全小学 4 年生を美術館に招待し、その際、家族の招待券を渡してもう 1 回来館を促す取り組みをしており、アウトリーチに参加した子が家族と美術館にきているかどうかを確認できる。

・そうした取組がいろいろな事業でもできると、定量的な評価にも使えるデータが得られるのではないと思う。

(委員)

・まずは、どういう構成にするのか、クライテリア、軸のようなものを作らないといけないと思う。もっと議論を深めた方がよいと思う。

(委員)

・分野によっても異なるのではと思う。子ども世代の習い事が増えているのか、趣味やお稽古を始めたことなど、ご自身の生活の中に芸術文化を落とし込んでいるようなことを指標に拾うことができないかと思う。

(事務局)

・能楽大連吟には子どもやまったくの初心者の方が参加することはあるか。

(委員)

・能楽大連吟は6割強が初心者。友達や家族と来ていただき、一定期間稽古を行い「高砂」を謡おうという内容だが、参加者は能を学ぶことはもちろんだが、一定期間集まることで新たにお友達ができ楽しくなり翌年も継続するという形が多い。隣の人も初めてで一緒に「高砂」を学びましょうという点でつながりを生んでいけることが多い。

・過去に参加された方に、大連吟ではアンケートをとっており、お友達がやっているから参加したという方も多かった。また、能のリズムの節が難しいからそれを習得したく継続している方もおられる。定期的に、参加者から何名かを抽出し、ヒアリングも行っており、何年参加してどこで休止されたかも調べることで、習得されて飽きてくる時点で何か新たな手法を取り入れるなど工夫しながら行っている。

(事務局)

・リピートされていた方がどこかで終わってしまうということもあったのか。

(委員)

・お能は西洋音楽と異なるので3年くらいは節が取れない。3年経つと取れるようになってきて、マスターしたと思ってやめる方もおられる。その先の継続は、能楽以外の要素、例えば仲間がいるかなども重要。ヒアリングでは皆さん熱心にお話してくださるため、そうした意見や指標も大切に、翌年にはそれを企画に取り入れたりしている。

・能楽大連吟に参加して本格的に能を習い始める方は大変多い。習い始めると能楽堂に行かれるため、能楽堂を訪れると大連吟の参加者に会うことが多く、とても嬉しい。大連吟への参加＝能の体験から習いに行くことに繋がっていく。これは単純に芸能への関心だけではなく、お友達と一緒に、子どもと一緒になど、芸術文化にはまっていくパターンがいくつかあるのではないかと思う。

(会長)

・つながりがどのように広がっていくか、深まっているかを追跡することや、あるいは効果を何らかの形で測っていければよいという意見だった。

(委員)

・商業施設や学校、公民館など色々な相手先と事業を展開することは素晴らしい。思いがけない方と接続することもある。

・アクションプランをどう達成できているのか。5年は長いようで短いため、年度ごとに達成状況をしっかりと確認しながら進められればと思う。

## <閉会>

(会長)

・成果をどのように発信するか、参加した方が拡散することを促す有効な方法はないかといったご意見、アウトリーチなど参加者と演奏者が近くお互いの顔が見える状況は、より親密で効果が高く、演奏者、受け手両方とも効果が有るのではないかといったことや、ジャズのコンサートによる活性化など場の問題についてのご意見があった。

・市の100周年記念事業では、色々なところで起こっている動きと連動しながら、膨らませていくと、アートによるつながりの効果がより期待できるという指摘もあった。

・委員が現地視察に行くことで、励ますことや、聞き取りたいことを頃合いよく考えながら、良い示唆を得ることができればと思う。

・アンケート調査の方法、文化振興ビジョンの効果をどのような指標で測っていくかは見ていく必要がある。つながりがどう広がったか、有効な方法があればよいが今後の課題になった。

・専門家が行う芸術と等身大の芸術がある。子どもたち、われわれが当たり前のように芸術を生み出し、交流して刺激しあいながら、専門家も等身大・一般的な方も含めて、よりまちが豊かになることが文化行事の中でできればよい。

・コロナ禍では芸術家を支援するプロジェクトが色々な国であった。ドイツ文化大臣の演説の中で、芸術家は、疑問、想像力、実験を通じて、色々なことを摘発したり講評の発言をしたりする重要な役割があり、それが民主主義を大事にすることにつながると言われていた。現在、世界中で民主主義とは何かが問われている。

・まちづくりの根底には皆が分かりあえる民衆的な空間があり、芸術によってそれを生み出していければと思う。

・ナイーブ・アートの作家、堀内氏のインタビューでは、絵心は人と人との心の空間を豊かにする、つながりをもっていく民主主義みたいなものだと言っていたことが今思い出される。アートによって民主的で豊かなまちを作っていければと思う。

(午前11時40分閉会)